

現代の

ことば

おぐら
小倉

きぞう
紀蔵

昨年暮れにソウルで日韓外相会談が開かれ、慰安婦問題に関する両国政府間の合意が発表された。日本政府は、合意を誠実かつ謙虚に履行し、元慰安婦の方々の名誉と尊厳を回復することに全力を挙げ

ていただきたい。 何よりも安倍首相は、自らの肉声で、元慰安婦の方々の心に届くような、敬意のこもったお詫びの言葉を述べるべきだ。また、韓国がつくる財

団（ここに日本が10億円を拠出する）の運営は、特定の歴史観だけが支配することを避けるべきだ。日韓が四半世紀の間苦しみながら出してきた論点の多様性を大切にしたい。

大多数のふつうの日本人は、これまで慰安婦問題に心を痛めてきたはずだ。人生を

ずたずたにされたと訴える女性たちに、なんとか応答したいという気持ち

を、心のなか

で持っているはずだ。だが、そのような素朴な気持ちを踏みにじってきたのは、両極端な「右」と「左」の陣営だった。自分たちの見解と少しでも異なる考えを、絶対に受け入れない。そして問題の解決ではなく、自己の陣営の主張を一点の欠損もなく実現することが目的になるので、一切の妥協もできなくな

った。だが、「右」の主張である

が、

「慰安婦」というのは売春婦にほかならず、強制性もなかった」というのは虚構にすぎない。また「左」のいうように「日本軍が数十万のいたけな朝鮮少女を強制連行した」というのも、根拠がない主張

だ。 私たちは、歴史に対する反省の気持ちを強く抱きながら、「ほんとうは何が起こったのか」を知りたいのである。韓国・世宗大学の朴裕河教授は『帝国の慰安婦』という本を書いて、慰安婦は日本帝国の外側にいた人たちではなく、帝国のシステムによって動員され、兵士たちと「同僚的」な感情まで共有することがあった、という内容を語っ

た。それほど帝国の支配は全体的かつ精緻だったのである。私たちはこの本を読んで、慰安婦たちの多様な境遇に深く思いを馳せ、帝国の複雑な暴力性をますます解明したくなる。

ところが韓国と日本の「左」の陣営は、「この本は日本を免責するものだ」といって激しく糾弾した。韓国の検察は元慰安婦たちによる訴えをもとに、朴裕河氏を名誉毀損の罪で在宅起訴した。なんとこの暴力性であろうか。自分たちの構築した「正しい」歴史像と合わない叙述をした者を排除しようとする姿勢からは、歴史に対する真摯さがまったく伝わっていない。

「日本軍が数十万人の少女たちを白昼、奴隷狩りのように連行した」というのが韓国における慰安婦問題の原型的イメーシだ。韓国人がこのわかりやすいイメーシから一歩も出ないまま日本の責任を問うのなら、それに応答することは歴史への冒瀆になる。日本が応答すべきなのは、多様で複雑な歴史の現実全体に対してである。そしてそれは現在の韓国人が考えているほど、単純なものではない。帝国というものの性格を単純化し過小評価しているかぎり、日本人も韓国人もこの帝国のくびきから離れられないのである。

（京都大教授・東アジア哲学）



慰安婦問題